

感染症・予防接種レター (第67号)

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会では「感染症・予防接種」に関するレターを毎号の小児保健研究に掲載し、わかりやすい情報を会員にお伝えいたしたいと存じます。ご参考になれば幸いです。

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会

委員長 多屋 馨子 副委員長 岡田 賢司 乾 幸治 三田村敬子 並木由美江
菅原 美絵 津川 毅 古賀 伸子 三沢あき子 渡邊 久美

2月4日は風疹ゼロの日：2月は風疹予防強化月間です

—30~50代の男性もMRワクチンを受けて2020年度までに風疹排除の達成を—

2012~2013年に日本では1万6千人を超える大規模な風疹流行が発生した(図1)。約90%が成人で、男性が女性の約3倍多く発症し、特に20~40代の男性と20代の女性が多く発症し、職場での集団発生も多数発生した(図2)。2008年に大規模な全国流行を起こした麻疹より流行規模は大きくなった。2013年5月のピークから約半年経過した頃をピークとして先天性風疹症候群(congenital rubella syndrome: CRS)が多く報告され、2012~2014年のCRSの報告数は45人になった(図1)。これを受けて、厚生労働省は「風しんに関する特定感染症予防指針」(平成26年厚生労働省告示第122号)を告示し、「早期に先天性風しん症候群の発生をなくすとともに、平成32年度までに風しんの排除を達成することを目標とする。」と定めた。

2012~2013年の風疹流行は日本の風疹ワクチンの定期接種制度で説明できる(図3)。1977年から風疹ワクチンの定期接種が始まったが、当時は女子中学生を対象とした学校での集団接種であった。接種率も高く、

多くの女性が風疹ウイルスに対する免疫を獲得した。しかし、女性だけがワクチンを受けていても、風疹の流行は抑制できず、数年毎に大規模な風疹の流行が発生していた。1995年度から男女幼児、男女中学生を対象に風疹ワクチンの定期接種が始まったが、学校での集団接種から、医療機関を受診して受ける個別接種に変更となったため、中学生の接種率は激減し、特に1979年4月2日~1987年10月1日生まれの男女は接種率が10%程度までに減少した。また、1979年4月1日以前に生まれた男性は風疹ワクチンを定期接種として受ける機会が1回もなく、流行後3年が経過した2016年度の調査でも、風疹ウイルスに対する免疫を持たない人が30代後半~50代の男性に多数残されたままである(図4)。

1990年4月2日生まれの男女から麻疹風疹混合ワクチン(以下、MRワクチン)を原則とする2回接種制度が導入された。小学校入学前1年間、中学1年生、高校3年生相当年齢のいずれかの年に2回目のワクチン

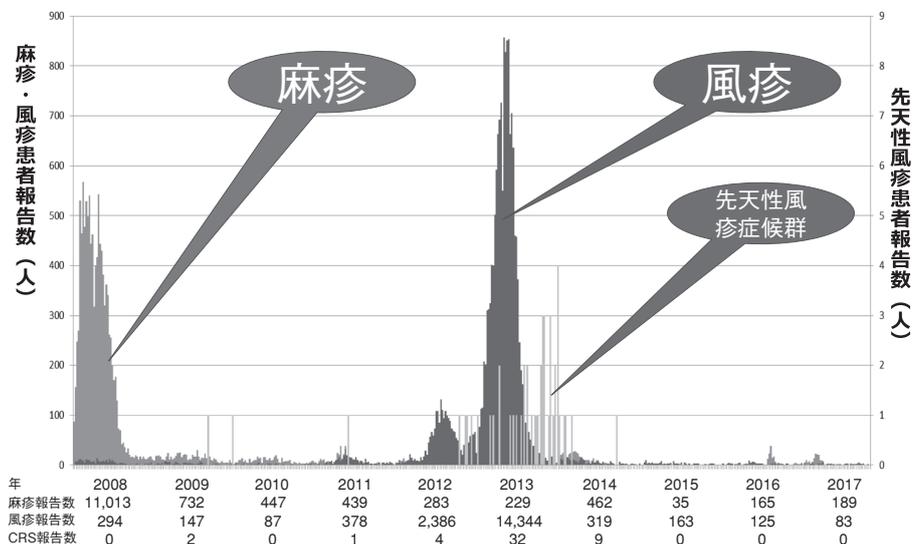


図1 週別麻疹・風疹・先天性風疹症候群報告数 2008年第1週~2017年第47週(感染症発生動向調査より)

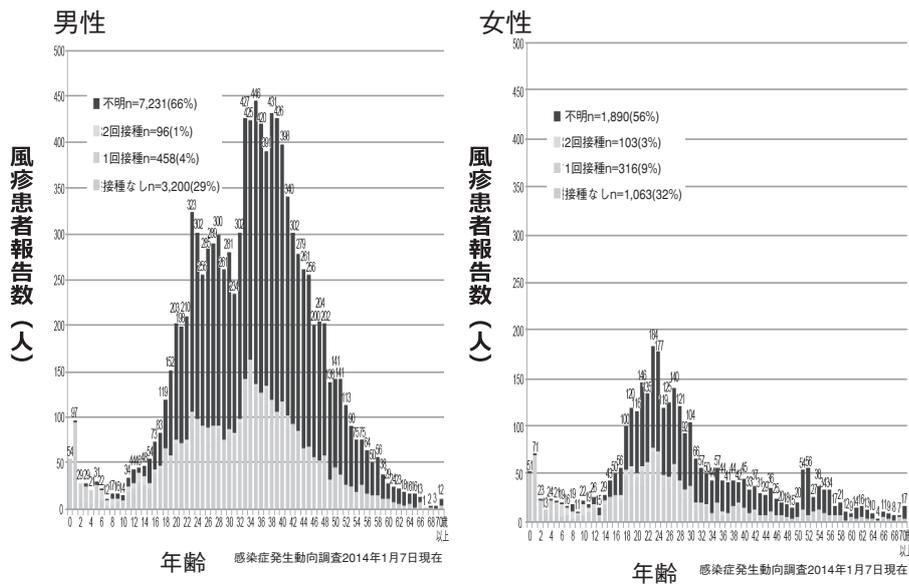


図2 男女別予防接種歴別風疹報告数 2013年第1～52週（感染症発生動向調査より）

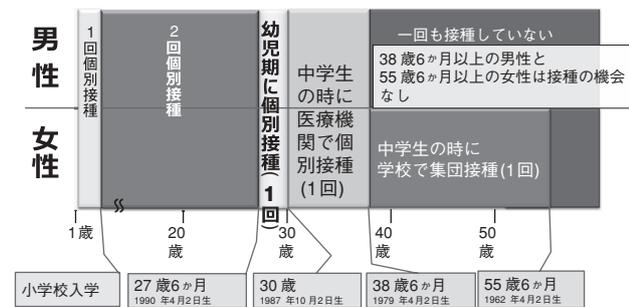


図3 風疹含有ワクチンの定期予防接種制度と年齢の関係（平成29（2017）年10月1日時点）

ンを定期接種として受けることが可能となった。この制度は麻疹のみならず風疹に対しても大きな成果をもたらし、2～19歳の感受性者は激減した（図4）。しかし、高校3年生相当年齢で2回目の定期接種の機会を持った1990年4月2日～1995年4月1日生まれの男女の接種率は約80%で、2回接種制度があっても2回のワクチンを受けていない人が多いのも事実である（図5）。

2020年度の風疹排除に向けて、「風しんに関する特定感染症予防指針」が改正され、2018年1月1日から施行される。改正点は、風疹と診断した場合、これまで保健所への届出が診断後7日以内であったのを変更して、直ちに届け出ることが医療機関に義務づけられた。また、風疹が1例でも発生したら、積極的疫学調査を行って、発生時の迅速な対応に努めることが明記された。さらに、これまで「可能な限り」としていたPCR法等を用いた風疹ウイルス（遺伝子）の検出を原則として全例に実施することが求められた。

海外ではまだ風疹が流行している国も多く、2017年はフィリピンで風疹が流行しているとの情報もある。次々と海外から風疹ウイルスが持ち込まれている現状には変わりなく（図6）、風疹罹患歴がなく、風疹ワクチンの接種歴なしあるいは不明の人は、海外渡航前にMRワクチンを受けて欲しい。特に30～50代の男性には多数の風疹感受性者が蓄積されたままである。これらの人々が免疫を持たなければ、2012～2013年と同じ流行が起こってしまう。ラグビーワールドカップ2019日本大会（2019年9月20日～11月2日）、2020年の東京オリンピック、パラリンピック競技大会（2020年7月24日～9月6日）では、多くの人々を海外から迎えることが予定されている。風疹の流行が再びあってはならず、ワクチンで予防できる風疹そしてCRSを予防するためには、定期接種の接種率を第1期、第2期ともに95%以上を目指すこと、医療関係者、保育関係者、教育関係者、多数の人々と接触する職種の人、外国からの訪問客と接する機会が多い職種の人、MRワクチンの接種記録を1歳以上で2回持っていることを確認して欲しい。女性は妊娠前に小児期も含めて2回のワクチンの記録を持って欲しい。もし記録が見つからなかった場合は、「2月4日風疹ゼロの日」あるいは風疹予防強化月間である2月中にMRワクチンを受けて、自らの手に接種記録を残して欲しい。未来の子どもたちを風疹から守り、自らの風疹罹患を予防するために、今こそ大人がMRワクチンを受けて風疹予防に努めて欲しい。

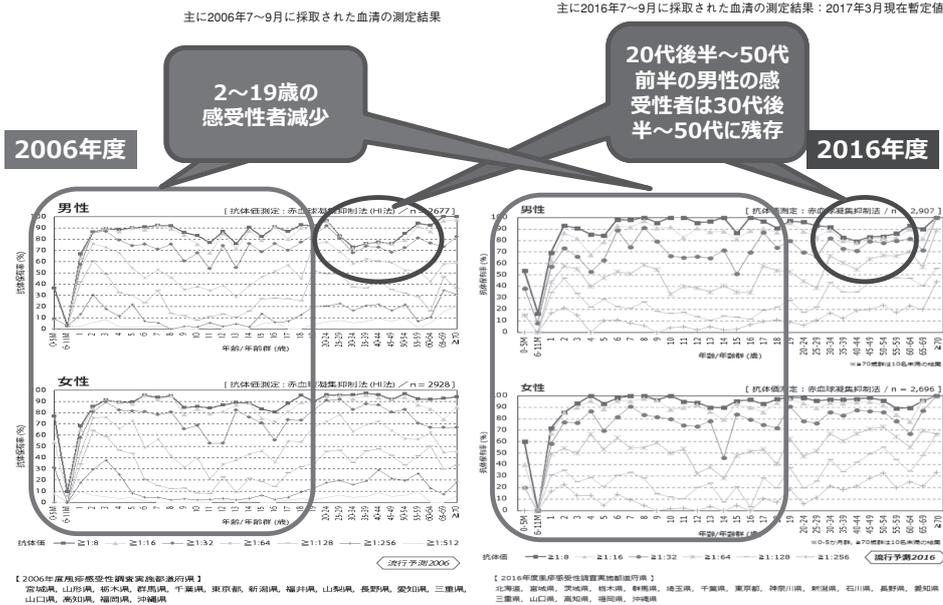


図4 年齢/年齢群別風疹抗体保有状況，2006年度と2016年度の比較（感染症流行予測調査事業より）

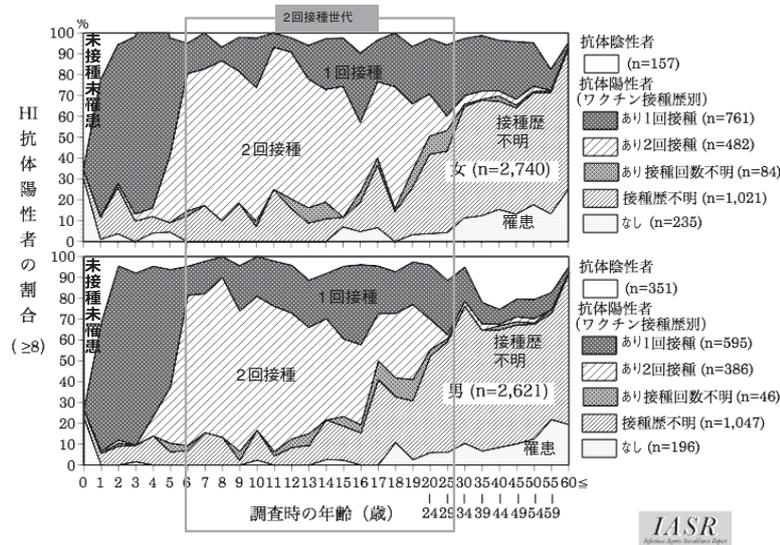


図5 年齢別予防接種回数別風疹抗体保有状況（2015年度感染症流行予測調査より）

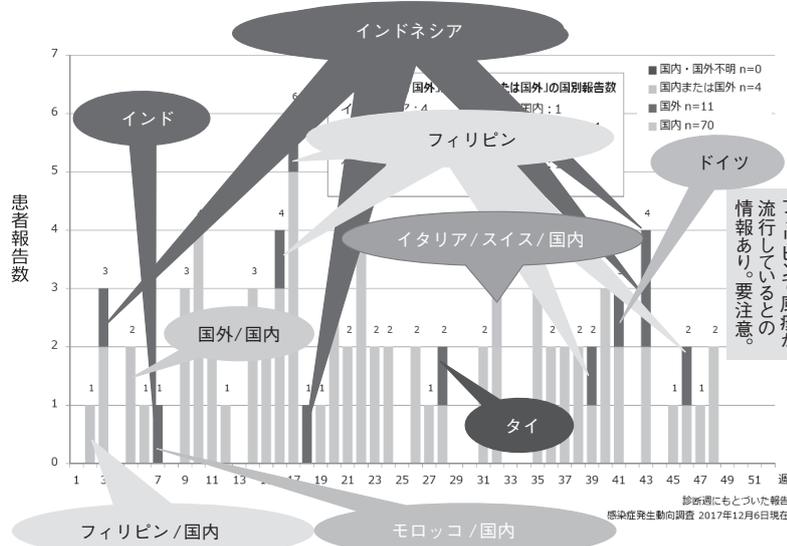


図6 推定感染地域別風疹患者報告数，2017年第1～48週（感染症発生動向調査より）